International Cooperation Center for
Agricultural Education, Nagoya University

ICCAE news

No.19 2011.6.1

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成23年6月1日発行　通巻19号（年2回発行）

発 行／名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-4225（受付）FAX 052-789-4222
http://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/index.html
e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

第12回オープンフォーラム開催のお知らせ

名古屋大学農学国際教育協力研究センター第12回オープンフォーラム「途上国留学生教育の人造り・国造りへの貢献～アフガニスタンの復興に向けて～」が2011年10月６日、７日に名古屋大学野依記念学術交流館において開催されます。同フォーラムでは、留学生教育の開発途上国の開発及び我が国大学の研究・教育活動への意義やアフガニスタン「未来への架け橋・中核人材育成プロジェクト」の開始を念頭に、復興途上にある国に対する留学生教育の意義と課題について議論いたします。皆様奮ってご参加ください。

「農学国際協力」の発刊に当たって

農林水産業は人間生活を保障する基幹産業です。その産業の発展を担う農学は、自然科学と社会科学が統合された高度に総合的な学問領域でなければなりません。日本が大半の食料を海外に依存している現状では、日本の農学も国際的な広がりをもって世界の問題に関与していかなければならないことはいうまでもありません。途上国が直面している食料不足、貧困ならびに環境破壊などの問題の解決には、既存の農学に加え、さらに現地に適応した技術体系の開発、農林水産物生産の技術面と経済面の相互調整、自然環境との調和、地域の仕組みや生活の知恵など地域資源をトータルに分析し利用する視点が必要です。「農学国際協力」は、国際協力の一分野ですから、世界平和を構築するための人道的な見地から活動することはいうまでもありません。しかしそれに加えて農学の基本理念に忠実に、日本をはじめとする国々の国益という見地から、課題に取り組んでいくことも重要です。

農学がこのような視点を考えつつ、世界の現場の問題に取り組み、技術協力を実施していくことはいうまでもありませんが、もっと重要なことは、人材の育成です。残念ながら、現在の日本の農学の現状をみるに、農学を武器に国際協力分野に身を投じようという人材が不足していることは否めません。現状では、日本の農学分野における研究・技術開発では、自然現象の科学的な解析・理解とそれらに基づいた最先端技術が主要な分野であり、これらの基礎的な研究が農学分野の活性を支えているように見えます。このような日本の農学が国際的に展開していくということに対して理解を深め、そのような視点を持った若い世代を育てていくことが重要であると考えます。

「農学国際協力」誌は、このような若い世代を育てていくためのプラットフォームの役割をめざします。農学における最先端研究をいかに国際的に展開させるか、またそれを世界的な問題の解決のためにどう用いていくかを考えます。これによって、最先端研究と国際的な課題の把握が同居しているような人材を育成することができれば、望外の喜びです。加えて農学の研究成果の国際的な展開や、国際協力活動に理解をもった研究者やサポーターを徐々に増やしていきたいと考えています。

このため、「農学国際協力」誌では、農学的視点から世界の実像を理解するための論文や農学研究の国際的展開の可能性を示す論文、先進的研究の成果を世界的な問題の解決のために用いたケースレポートなど意欲的な論文を集めて、みなさまの国際協力活動のお手伝いをしたいと考えています。

（前多敬一郎）

国際ミニシンポジウム「Challenges of Rice Research in Kenya: Towards Doubling the Rice Production by 2018」開催

ICCAEとジョモケニヤッタ農工大学は、2010年11月19日、「Challenges of Rice Research in Kenya: Towards Doubling the Rice Production by 2018」と題する国際ミニシンポジウムをケニアにあるアフリカ人造り拠点（AICAD）で開催しました。東アフリカにおける稲作振興に向けた緊急に解決すべき基盤的課題の特定とその解決の方向性の提示を目的とする国際共同研究「東アフリカ稲作振興のための課題解決型研究」に参加している日本とケニアの研究者が、これまでの研究成果を報告しました。稲作可能地域の特定とコメ生産ポテンシャルの評価、冷害、旱ばつ、いもち病等に対するイネ品種の抵抗性の評価、育種素材の整備と育種戦略の構築、ネリカ米普及の社会経済条件の解明等に関する発表が行われ、ケニアの稲作振興に関心を持つ、FAO、農業省、ケニア農業研究所、国立灌漑公社、JICA、JSPS等からの多数の参加者によって活発な意見交換が行われました。ケニアに適したイネ品種の開発や陸稲栽培の普及に向けて、関係機関間の連携を強化するとともに、日本とケニアによる共同研究を推進することが確認されました。（槇原大悟）

講演の様子

JICA課題別研修（長期）「生命農学国際コース」への入学生の紹介

名古屋大学大学院生命農学研究科が2009年度より実施しているJICA課題別研修（長期）は、自国の農業／農村開発に資する政策立案・実施・マネージメントに関わる人材育成を目指して、開発途上国の大学・研究機関・省庁職員を修士課程又は博士課程に受け入れています。最終年度にあたる2011年度は、イラク国チャムチャマル地区の農業研究局よりAhmet Sami Shaker氏が来日し、動物機能制御学研究分野にて勉学に励んでいます。（伊藤香純）

農学国際人材データベース廃止に関するお知らせ

ICCAEでは、1999年度より、農学分野の協力人材データベースを作成・管理してきましたが、農学知的支援ネットワーク（J-ISNAS）（http://jisnas.com/index.html）の設立を受け、同データベースの任務は終了したと判断し、本年5月末をもって廃止することと致しました。これまでの皆様のご理解とご協力に改めて感謝申し上げます。登録されている皆様の個人情報につきましては、ICCAEの個人情報保護内規に則って適切に処置させていただきます。（伊藤圭介）

外部資金によるプロジェクト推進（2011年度採択案件）

日本学術振興会「二国間交流事業（ケニアとの共同研究）」

ケニア・ムエア灌漑地区におけるイネいもち病の多発生に関する学際的研究（2011～2012年度）

ケニア最大の灌漑水田地区ムエアでは、2007年以降、同地区で優先的に栽培されている水稲品種Basmati370にいもち病が多発し、コメ生産が半減するなど大きな問題となっています。いもち病の被害を軽減し、他の地域での発生を防ぐためには、同地区における発生原因を究明し、適切な対処方策を開発することが重要です。本研究では、名古屋大学、国際農林水産業研究センター（JIRCAS）、ジョモケニヤッタ農工大学の共同研究により、ムエアにおける被害の実態と発生原因、ケニアにおける優先いもち病菌レースの分布、ケニアの主要イネ品種のいもち病真性抵抗性を明らかにするため、現地におけるフィールド調査、イネ栽培実験、いもち病菌の接種試験等を行います。これらの調査および実験から得られた成果に基づいて、いもち病対策の方向性を提示する計画です。（槇原大悟）

いもち病が発生した水田

JICA草の根技術協力事業

カンボジア国　伝統産業の復興による農産物加工 技術振興プロジェクト（2010年12月～2013年12月）

ICCAEでは、科学研究費補助金により、カンボジアにおいて消滅の危機に瀕している伝統的な農産物加工品「米蒸留酒」の品質向上・商品化・高付加価値販売による酒造農家の赤字経営改善という実践的研究（2008年～2010年）に取り組んできました。また、文部科学省「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業を通じて、上記の実践をカンボジア王立農業大学（RUA）とともに実施することで、同大学に“現場での実践を通じた自国農業の問題解決に資する実践的研究・教育体制”を導入し、人材育成を行ってきました。これら2つの事業成果を活用し、人材育成を行ったRUAをカウンターパートとして、見いだされた高品質の米蒸留酒を製造する技法を他の酒造農家に普及することで、カンボジア国タケオ州の対象地域における生計向上と伝統産業の活性化による地域開発や産業の活性化を目指しています。（伊藤香純）

着 任 挨 拶

北 村 友 人　上智大学総合人間科学部教育学科　准教授
客員教授（任期：2011年4月1日～2012年3月31日）

途上国の教育開発に関する政策研究や学校レベルでの調査などを行うとともに、国際機関・援助機関の国際教育協力プロジェクトの実務にもさまざまな形で携わっています。主に東南アジア・南アジア諸国の教育について研究を行ってきましたが、近年はとくにカンボジアやラオスなどのインドシナ諸国を中心に現地の大学や教育省と共に調査研究に取り組んでいます。名古屋大学では国際開発研究科において7年間教壇に立ち、貴重な経験の数々を積ませていただきました。今度はICCAEで、私の専門領域とは異なる専門家の先生方と議論をさせていただく機会を頂戴し、非常に刺激的な時間を過ごしております。こうした形で名大に戻って来られましたことを、とても嬉しく思っています。センターでは、途上国の農村における人材育成のあり方について、研究面・教育面で貢献をできればと思っています。浅学非才な私ですが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

略歴 1972年生まれ。慶應義塾大学卒業。カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）教育学大学院修士課程・博士課程修了。Ph.D.（教育学）。専門は、比較教育学、教育社会学、国際教育開発論。国連教育科学文化機関（UNESCO）パリ本部教育局教育専門官補、名古屋大学大学院国際開発研究科准教授を経て、現職。他に、ジョージ・ワシントン大学フルブライト研究員、ダッカ大学（バングラデシュ）日本研究センター客員教授、王立プノンペン大学（カンボジア）教育学大学院国際諮問委員等を歴任。

外国人客員教授／客員研究員紹介

農学分野におけるe-learningコースの開発に関する研究

アヌチャイ・ピニョプミン　カセサート大学獣医学部・大型および野生動物臨床科学科　准教授
外国人客員教授（任期：2011年1月17日～3月4日）

ICCAEの外国人客員教授として、野生動物生殖工学に関するe-learningコースの開発に関する研究に取り組みました。e-learningは、教える側と学ぶ側の双方にとって非常に価値のあるツールです。開発中のe-learningコースには、生殖生理学、精液採取・保存、発情同期化、人工授精法、妊娠診断など野生動物の人工授精に関するコンテンツが含まれます。本研究を通して、e-learningコースの開発には多大な努力が必要であることを実感しました。

客員教授として招へいしてくださったICCAEの皆様、とくに山内章教授と前多敬一郎教授に深く感謝申し上げます。また、生殖科学研究室の東村博子准教授をはじめとするスタッフと学生の皆様、動物生産科学第1研究室の大蔵聡教授にも滞在中大変お世話になりました。ここに謝意を表します。名古屋大学の皆様とまたいつかご一緒できることを楽しみにしています。

略歴 1965年生まれ。1989年カセサート大学獣医学部を卒業し、獣医師資格を取得。1995年北海道大学獣医学研究科博士課程を修了し、獣医学博士を取得。カセサート大学獣医学部講師、助教授を経て、2007年7月より現職。同大学獣医学部長補佐、総長補佐、獣医教育病院長などを歴任。

カンボジアにおける乳製品の製造加工・貯蔵技術に関する課題と展望に関する研究

ノーン・チャクリヤ　カンボジア王立農業大学　助手
外国人客員研究員（任期：2011年3月1日～3月31日）

近年、カンボジアの首都プノンペンでは、欧米スタイルのパンや菓子類を提供するカフェが立ち並び、外国製のアイスクリームが流行するなど、乳製品への需要が特に高まっています。しかし、加工産業の発達が遅れているため、自国での加工生産ができていません。そこで、国内における乳製品の製造加工と貯蔵の課題を見いだすための共同研究を始めました。日本では、香川大学農学部の協力を得て、基本的なアイスクリームの製造技術を習得し、カンボジア産の原材料を用いた国内生産への応用方法を見いだし、帰国後は、国民に人気のある豆乳を用いた製品の可能性に関する研究に取り組んでいます。滞在期間中に実験指導をして下さった香川大学の小川雅廣教授、早川茂教授、そしてICCAEの教員の皆さまに感謝いたします。

略歴 1984年カンボジア生まれ。2006年カンボジア王立農業大学農産業学部卒業後、2009年同大学大学院農村開発学修士課程を修了し、2009年より現職。

ケニアのイネ品種の栽培特性評価および高収量・いもち病抵抗性系統のDNAマーカー選抜

キャサリン・マチュンゴ　国立灌漑公社アヘロ灌漑研究ステーション　研究・灌漑官
外国人客員研究員（任期：2011年4月12日～10月10日）

生命農学研究科および愛知県農業総合試験場の協力の下、ハバタキ×Basmati370の交雑後代系統を利用したいもち病圃場抵抗性系統のDNAマーカー選抜、ケニアのイネ品種のいもち病抵抗性評価およびケニア在来品種の栽培特性評価に取り組みました。また、岐阜大学応用生物科学部に受け入れて頂き、放線菌のいもち病に対する生物防除試験を行いました。これらの研究成果は、持続的いもち病防除手法の確立、ひいてはケニアの農家の収入向上に役立つものと期待されます。このような機会を与えて下さったICCAEならびに全ての関係者に心より感謝いたします。

略歴 1980年生まれ。1995年、ナイロビ大学農学部卒業後、2009年、ジョモケニヤッタ農工大学大学院にて修士号（園芸学）取得。2008年10月より現職。

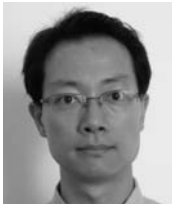
研究員紹介

山根裕子　協力ネットワーク開発研究領域　国内研究員（任期：2011年4月1日～2012年3月31日）

ケニア西部ビクトリア湖岸の土地荒廃進行地域において、家畜が土壌侵食に及ぼす影響を評価するための調査と対象地で行われているNGO等による土壌流亡防止を目的とした支援活動の実態を探り、問題を抽出するための調査を行っています。私の研究は、地域研究の手法を用い、自然科学と社会科学の両方から調査を行い、地域に暮らす人々の視点に立った地域支援の方法を探ることを目的としています。昨年からは土地荒廃進行地域の下流に広がる稲作地域において、地域研究を基盤としたアフリカ型の稲作支援の方法を探るための研究も始めました。

略歴　1970年12月鳥取県生まれ。東北大学農学部卒業（畜産学科）、東北大学大学院農学研究科修士課程修了後、2005年京都大学大学院農学研究科博士課程単位取得退学（農学博士）。2008年5月より名古屋大学農学国際教育協力研究センター研究機関研究員を務めた後、2011年4月より現職。

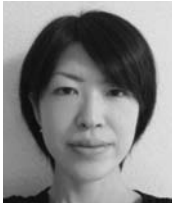
浜野　充　プロジェクト開発研究領域　研究員（任期：2011年4月1日～2012年3月31日）
JICA草の根技術協力事業「伝統産業の復興による農産物加工技術振興プロジェクト」現地マネージャー



これまでJICAの青年海外協力隊、技術協力プロジェクト専門家として国際協力に従事した後、2008年より名古屋大学大学院生命農学研究科博士課程後期課程（ICCAEプロジェクト開発研究領域）で、カンボジアの農村における米蒸留酒の品質向上と経営への影響に関する実証研究を行い、2011年1月よりICCAEが受託したJICA草の根技術協力事業の現地マネージャーとして派遣されました。これまでの経験を生かして、カンボジアの農村の酒造農家の技術向上と経営改善に貢献したいと思います。また、引き続き技術普及と酒造業の変化について研究を続けていきます。

略歴　1973年1月京都府生まれ。近畿大学農学部卒業（国際農業開発）、JICA青年海外協力隊、英国イーストアングリア大学（UEA）農村開発学修士課程修了。2003年以降JICA技術協力プロジェクト（カンボジア：農業、ジェンダー主流化）に従事。2008年名古屋大学大学院生命農学研究科博士課程後期課程入学、現在JICA草の根技術協力事業「伝統産業復興による農産物加工技術振興プロジェクト」現地マネージャー。

仲田麻奈　協力ネットワーク開発研究領域　研究機関研究員（任期：2011年7月1日～2012年3月31日）



修士・博士課程では、イネの乾燥ストレス耐性について、とくに根の発育と機能に注目して研究に取り組んできました。フィリピンやタイで稲作圃場を見学した際に、自分が研究の対象としている実際のイネの栽培現場を初めて自分の目で見て、農家の人や現地研究者の生の声を聞き、栽培の実態を正確に捉えることの大切さを痛感しました。これまでに培った知識や経験を活かし、アフリカの稲作振興に向けて少しでも貢献できるような研究成果を出せるよう頑張りたいと思います。

略歴　1981年生まれ。2005年近畿大学農学部農学科卒業。2007年名古屋大学大学院生命農学研究科博士課程前期課程修了。2011年名古屋大学大学院生命農学研究科にて博士号（農学）取得。日本学術振興会特別研究員を経て、2011年7月より現職。

海外実地研修について　早川由起　農学部資源生物科学科4年

昨年度、この海外実地研修プログラムに参加し、農業を通してタイやカンボジアの調査を行いました。現地の学生に通訳をしてもらい、話し合いながら調査を進めましたが、正しい情報を集めて正しく現状を理解するということの難しさを痛感しました。言葉の壁はもちろんのこと、歴史的背景・風土に対する理解の薄さや、気づかぬうちに持っている固定観念も大きな原因となりました。

カンボジアは、地雷や貧困に苦しむ国といわれ、日本からも多くの支援が行われていますが、農村を訪れた際に出会った人々は現在の暮らしに満足しているようで、本当に必要な支援とは何かということを考えさせられました。しかし、街では、職がなく物乞いをする人にも何度か出会いました。お金がないと食べ物が得られない街の人々と、大きな利益はなくとも自給自足の生活ができる農村の人々の生活を知り、農業が、人々の生活を豊かにするために最も基本的で最も重要な産業であるということを、改めて感じました。そして、同時に自給率40%の先進国日本が抱える食料・農業問題の大きさも実感し、農学を学んでいることの使命感と誇りを感じました。

今年度の研修では、タイ、カンボジア、そして日本について、農業だけでなく幅広い分野の知識と、それに対する柔軟な考え方を持って、現地の調査に望みたいです。

海外実地研修の参加者

オープンセミナー（2010年12月～2011年6月）

回　数	日　時	テーマ	講　師	所　属
2010年度 第4回	1月28日	タイにおける野生動物保護のための人工生殖技術	アヌチャイ・ピニョプミン	タイ・カセサート大学獣医学部准教授／ICCAE外国人客員教授
第5回	3月22日	ケニア西部高地における非生物的ストレス条件下での陸稲生産システムの開発	浅井　英利	ICCAE研究員
2011年度 第1回	5月9日	天水農業を対象とした作物・資源管理研究	伊藤　治	元国際農林水産業研究センター 生産環境領域長
第2回	5月30日	持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）とは何か ―途上国における教育の可能性―	北村　友人	上智大学総合人間科学部准教授／ICCAE客員教授